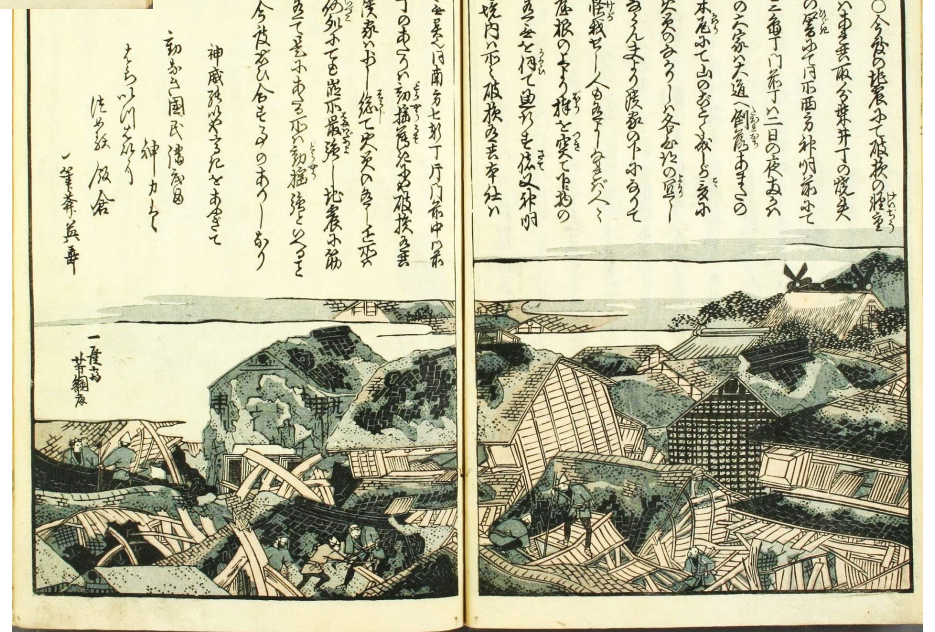


安政2（1855）年10月2日の夜、マグニチュード6.9と推定される激しい揺れが江戸およびその近郊を襲いました。この大地震によって、江戸だけでも7千～1万人の死者を出しました。地震発生翌年に発行された『安政見聞誌』は、江戸各地の被害状況や風説をまとめたルポルタージュともいえるものです。



附録 茲又地震後いまだ市中おだやかならざるうち諸方よりさまぐなる一枚摺錦絵小本杯凡其数三百式拾余におよべり、絵店又は辻々にて商ふものあり、皆何れも人ごぞりてこれを求む、しばらくして公より御制禁の品がらゆゑのこりなく絶板せさしむ、しかはあれど大江戸の繁花広大なれば絶板の後もまたはあまれるものさまぐあり、その一つふたつを因によりてすゑにのするは後の世につたへて雨中のなぐさめに添る

※地口・洒落は元の物をわからないといけないから難しい。

○薬の引札

一ふくにていりぐゝ薬

妙ゆり出し

がたぐゝふるへによし

気ばかりながらつよひ口上奉申上候

一、抑此妙ゆり（註 売りの洒落）出しくづれ（註 薬の洒落）の儀は先年信州にて揺弘め候所、大ゆれ大難渋仕候間、叟じて他国へせりゆりおしゆり一切致さず候所、近年諸国に紛発、にせくづれ相見へ申候、別して京大坂東海道筋をおしゆり致し又々江戸表まえもにせくづれおしゆり仕、其上火事きとう（註 加持祈祷の洒落）をあげ、しごくぐらち（至極不埒の洒落）の義に付、急度ゆりどめ申付、私方いつほうゆりに仕候、最うたんとはゆり申さず、当十月限りにゆり子へ申渡候間、**逃出し野宿の御さはぎなく**御安心被成楽々と御夫婦中よく夜中のゆり出しは御じしんに毎夜く二三ふくづ、御用ひ可被成候はゞ御子孫繁昌致し、のら節の御子供衆は無御座候間、しつかり御だきつき被成、ア、モウいつそい、よの中と御評判被成下、御もとの程奉願上候

- 一、目のまはるやうにいそがしい 職人
- 一、目のかすむのは帳合さし引 材木屋
- 一、ねつのやうにあせをかく 車力 日雇
- 一、よあかしでかぜを引た 人入
- 一、づゝうにやんだ 借金
- 一、なんじうのやまひに 施行
- 一、高利座頭
- 一、地面持
- 一、株もち
- 一、かけ取 とりるゐ一切いむ
- 一、諸芸人參
- 一、猫のぺんく 草井大たいこ小たいこ
- 一、土蔵の粉

○用様 二日のばん、がらくと一度大きくゆり出しあとはたびぐりゆり出し人の手をかりずじしんに用ふべし又せんじるには火の用心を第一にすべし

○本家取押糺明所 こゝはどこくかしまのかいとうすじしつかりとうけあつた町百年目 要屋石蔵



仏蘭西相伝時疫予防法（一）
ウニオ）※一枚刷りあり

○薄羅紗又はうこんもめん
あるいはもんぱのるいにて
昼夜とも腹をふたえほどま
き置べし

○桶にゆをいれからしの粉
を五勺ばかりそのなかへ加
へ折々両足をさんりまでひ
たすべし

○家のうちに何にてもたき
ものをなして湿気をのぞく
べし

○一切の菓ものるいをくら
ふべからず

○此病を受たる時は熱き茶
のなかへ三分一焼酎を入砂
糖を少し加へ服すべし其う
へ焼酎にて惣身をこすりて
よし 以上大略

※通神鳥（つかみどり） ※一枚刷りあり
 ▲此通神鳥といふはいち名を能死だ鳥とて人の愁を
 よろこんでおのれが口をやしなふ事欲のくまたかに
 もひとしき化々化天烈の悪鳥なり

▲其嘴は黒ふしてやきば（焼場・八牙）するどく火
 をしよく（食）となしその息くさき事鼻もちならず
 むねはぶつぽう僧に似て首にほつすのごとき毛あり
 八宗九宗を丸のみにすはらの下に毛なくしてしろむ
 くくくと肥たるはユカンバかいといふくすりつけて
 毛毛（もうけ）沢山になることありかしらに小室の
 御符をいたゞき題目のひげ五六本はいるほうぶくろ
 にはからしをたくはへこしや（輿屋・腰）せなかは
 たまりしかねにてせんきがおころもちやは当日より
 七日く百ヶ日までむしものおびたゞしくはらの中
 には按摩とんほうといふ人に似たるむしありて慾の
 皮のあひだをくらふこと昼夜ひまなし左のはねにま
 んぢうあり右のはねにはみやうやくありてひとたび
 はゞたきすれば十貫二十貫の利にはしりと（飛）ん
 だ与力をますあしのけづめは刃がねにして地をとら
 すこと五六尺ふかくおゝいなる穴をうがつかたち鋤
 鍬ともいふべし尻尾は百葉ぶんくとして尻尾のし
 たのやげんにゝたるはこれなんとの雌としられた
 りしきみの葉かげにすをくふてたまごのたつときこ
 とたいひらめにもまされりあまねく余苦の世界にか
 けりまはつてとゞまるところをしらずとちまん両も
 つかみとらんずばあくことなしといへりそのこゝろ
 いきあだかも欲心ぞうちう（僧長・鳥）大鵬のおゝ
 いなるにもまされり鳴声毒けつこう（結講）くくと
 いふとぞ実いまはしきとりなりされども仏法僧のぜ
 んこん（善根・魂）ありて後世はあんよう浄土へみ
 ちびかんとこのこゝろざしありてあながちにくむ
 べきにもあらずいまそのかたちを写しもつてあまね
 く世人にみせしむるは自然と無常をかんじて邪剣の
 やいばをゝり慈悲心にかへりて親によくかしづき目
 下にあわれみをかけおのれがみを大切になし美食悪
 じきをつゝしみ養生をよくなして三日ころりをおそ
 るゝのこゝろにみちびかんと老婆親切のみ 東

水堂主人誌

異国のつけ文

あけくれ御したはしさのあまり、万里の海路いとひな
く、文して申入まぬらせ候、西洋にござ候へば、いつ
ぞや浦賀の入口にてちらと湊のはじめよりゆたかな国
と思ひそめ、どうか交易一卜度はいろよきへんじう
かゝひたく、雪のふる日もあめりかも、恋のやみぢを
はしけ舟、兎角思ひは深草の少将ならでいくたびか、
通ひぐるまの蒸気船、こゝろはせきに石炭ゆへ、むね
の烟の立のぼりて、思ひにたへかねてつぼうの、気を
はやごめの玉づさを、おくれどかふりふりしてん、ペ
るりとしたをあはたんす、いつも剣つきてつぼうにて、
魯西亜な我身を御さげすみ払郎西事のなさけなく、も
はやふたゝび英吉利西と、さつぱり思ひ切支丹、され
どもあきら

墨幹泥、まよひの帆綱きれやらず、是もいんぐわな焰
硝と思召下され、ひとへに二世のお固を仰付られ候
はゞ、ぼんのうのくもうち払ひ、さぞかしいさましく
候ひなんと、神風のりまぬらせ候、申あげたきこと
大筒には候へ共、よそに聞ゆる音をはゞかり、ゆる／
身じたくあなかしこ

はなるゝくにより
りゝしき御かため様 又々参る

同へんじ

御玉章のうるさゝに、御断申まぬらせ候、いつぞや御
出の節よりも、浦々までも困ものみはとりまきし小手
脛当、八幡座へも願かけて忍の緒とて露ほども、なら
ぬ仰は筋金いり、偃月刀ておとしても、兼て用意の星
兜、あんまりかたひ石弓は、大袖顔へはづかしい、ま
だ総角と思召、鎧のいとへからまゝとは

おひげのながいもほどがある、そんな障泥にのつたな
ら、おまへのほうは采配でも、こちらはそこをふきが
へし、くどひにはらが辰頭、高紐ひくいもこひなりと
思ふてゆるし候まゝ、みなかみ風とあきらめて、長刀
鋒をよつでにつゝみかへり帰帆と被成候、よにかみ／
申まぬらせ候かしこ

日野屋もとより

よそ／しきくに様かへる

十方世界三佛集
菩提手向三股對善

冥途旅蓮其臺道連

通計四十八個

うへびの流るる病小作...
あつこりの病を...
はつたて...
悔む...
ふまの...
悼米庵

あつこりの病を...
悔む...
ふまの...
悼川柳

あつこりの病を...
悔む...
ふまの...
悼得無

あつこりの病を...
悔む...
ふまの...
悼小松

あつこりの病を...
悔む...
ふまの...
悼二葉

あつこりの病を...
悔む...
ふまの...
悼國々

あつこりの病を...
悔む...
ふまの...
悼亀年

あつこりの病を...
悔む...
ふまの...
紀ある

曲彈 鶴澤文二

俳諧	過日庵祖郷	木偶	吉田東九郎
書家	市川米庵	俳優	松本虎六郎
名妓	稲本樓小箱	落語	上方文六
狂吟	緑亭川柳	家元	清元延壽太夫
墨画	一立齋廣重	俳優	尾上格翁
狂歌	熱栗園千壽	勇	万力岩藏
著述	柳下真種貞	鎌	竹本権吾太夫
軍談	一竜齋貞山	墨家	櫻窓三拙
俳諧	惺庵西馬	活花	貞植齋
書家	大竹蔣塘	力士	寶川石五郎
墨家	英一笑	俠客	仁組長左門
狂歌	六朵園二葉	三系	杵屋六左門
戯作	樂亭西馬	三弦	清元市造
落語	鈴舎馬風	戯作	五遍舎半九
俳優	瀧小六	幫間	都与佐太夫
音曲	竹本児平	太夫	音曲
墨工	立川國郷	三弦	岸澤文字八
音曲	天狗連魚辰	女匠	都千枝
音曲	常磐津須奈	のど	清元染太夫
俳諧	福芝齋得燕	はし	清元鳴海太夫
墨名	石上龜年	二紙	清元秀太夫
美音	常磐津李義	文學	土肥南海
妙音	常磐津李栄	書法	渡邊源藏
清音	常磐津小若	著作	滝澤琴童

山東京山録



【十方世界(じつぽうせかい)三仏(さんぶつ)乗(じやう)主(ず)菩
提(ぼだい)の(手)た(向)むけ(三服(さんぷく)さんぷく)对善(つゐぜん)冥途
(よみぢの)旅(たび)蓮台(のりの)道連(みちづれ)】
こたびの流行病に犯れ黄泉の客となりたるものゝ最多かる中に
四方にその聞えたる人々をかいしるすついで知己を悼むたはれ
歌をつらねていさゝか六字の手向にかゆる

悼米庵

かなしみのあまりまなこをする墨や筆のいのちもたえにしあと
に

悼川柳

春毎に目をふく風のやなぎだるたがはぢけては月もやどらじ

悼得蕪

福芝齋得蕪あれとやいのりしに常なき風ぞふき組のうた

悼種員

秋風に落ての後もめづるらんつえし甘味の柿のたね本

悼楽亭

塞翁がひきゆく駒にうちのりて西のみやこへゆきてかへらじ

悼広重

極楽の景色や題に画くらん新薄墨ときえし後まで

悼小稲

稲本におきそふ露を身にをびて羽風にさわぐう廓すゞめかな

悼半九

かなぶみをよみぢのたびの膝栗毛なき師の跡をおふもいたまし

悼二葉

五ツ葉の松のふたばの散うせてみどりをよべるかむるまで哭

悼国郷

立川の水かれ／＼て歌川になみだの雨のいとゞますらむ

悼才二

音楽にやぐら太鼓も打ませてはちすのゆかにのりのひき物

悼龜年

いしづみにおのがなき名をゑりとめてこけの下にぞよろづの代
やふる

戊午季秋

紀おろか

九臯堂主人書

まだおもかげがゆめまぼろし／なくものはお身うち斗り
かえず／＼もおなごりおしい／たれかなしむものもあらふ
みつればかくる世のならひ／さるものは日々とうとし
盛らぬうちにちりました／お江戸の花がちりました
おしくはないがゐてもよい／長いきすれば
うりだしかつてこれはしたり／なきのちはをしくなる
お名まへがかたみ／よい道づれの同行三人
お女中だけにおしまるゝ／まれものでござりました
おしうござり升／おとしの上でござり升

有のそのまゝ五号
俣西南戦場友軍より焼はらひたる平
街の煙いまだ尽きざるに夜もほの／
明けなんころ霧にまぎれ賊兵は熊
本城の壕ばたまでひたと押よせたる
に友軍ははじめて賊軍が野山にみち
／＼たるを知りかねて伏せもふけた
る地雷火の地面を賊はふまず西郷の
宿陣前には小高き土手を築き青竹を
やらひ檜木の板に自銘の建札なせる
よし其本営は川尻にありて熊本城を
去ること一里西郷は陣中にて温泉に
浴し困碁に日を暮し俳人茶坊をよせ
て悠悠閑寛たるありさまなりと風説
もありますがどうであろう跡はをみ
／＼次号に報せます

16 山東京伝「亀の介科」
常磐なる松藻を甲に載て千代よろづ代をふる池の亀

阿女里香通人
 きんぱ／＼さんちよろ かむなんほう とくりいつ あるほ
 ろめ んそとん くるてき ふくりんたん コウ／＼ハア
 紀於呂香訳

めでたいことを きんぱ
 うれしい事を さんちよろ
 かなしい事を めつそ
 きん／＼を にきゆるちん
 てつほうを ろんとう
 いくさを しやゆう
 ふねを かつと
 けんくはを こうろまん
 たばこを ぱん
 きせるを ぱんいう
 茶のことを うづい
 さけを たらあか
 とくりを とんき
 米のことを てんとろ
 さかなを あかつう
 なまよひを とろんこ
 水の事を じやむ
 あぶらを きんぷ
 きものを しんひ
 ふんどしを ふくりんひ
 きん玉を ふくりん
 ぼうずを くつうに
 とうらく者を とろんこ
 りこうを すでい
 ばかものを ぱめ
 ねる事を へゑする
 日がくれるを とつふ
 てゝおやを あちやさん
 はゝおやを かあとん
 ていしゆを くらどや
 女ぼうを によりん
 子どもを ちやあ
 よき男を へんやろ
 ちんぽを ほうひし
 おまんこを へろんす

嘉永七年庚申八月六日

八代目

市川團十郎

猿白院成清日田信士

行年

三十二歳



嘉永七年八月六日
猿白院の主人日田信士の行年

嘉永七年甲寅年八月六日浪花三而没ス

猿白院成清日田信士

八代目

市川團十郎

行年三十二才



祥世

志波の暮れ

樹乃かひをよみ

かゝぬ縁の

門出とる身

若の毛

三木

根をうらむ身

かきけり

深き水

嘉永七甲寅年八月六日 行年
三十二歳

八代目市川團十郎

猿白院成清日田信士

なに故にさかりの花の一ト枝
を切て阿三陀のまへに立もの

嘉永七甲寅年八月六日浪花に
而没す

猿白院成清日田信士 八代

目市川團十郎 行年三十二才

辞世 しら波の墓の術のかひ

ぞなきかへらぬ旅の門出する

身は

夜雨庵三舛

根をわくる頃にかれけり深見
草

◇服部幸雄『市川団十郎・代々』より抜粋

大坂での自殺

嘉永七年（一八五四）六月の末、八代目は土用休みを利用して在坂中の父海老蔵を訪ねようと思いついて江戸をたつた。途中名古屋で興行していた父と一座し、閏七月一日を初日として「与話情浮名横櫛」の与三郎、「曾我对面」の十郎などで好評を得、二十三日に打ち上げた。そこから父とともに大坂に赴き、二十八日に道頓堀中の芝居へはなやかに船乗り込みをした。ここでは市川白猿の芸名で、当たり役の「児雷也」と「切られ与三」を出す予定で、初日を待つばかりとなっていた。しかしその初日八月六日の朝、島の内御前町の旅館植久の一室で自殺してしまった。三十二歳だった。その原因については、彼の極端に神経質な性格に起因するというもの、**七代目の愛妾ためとの確執によるもの**、夏の休みに江戸を離れて大坂に出演することの不義理に悩んだとするものなど、さまざまな説が語られているが、ほんとうのことは誰にもわからない。法名**篤誉浄庭実忍信士**といい、**大坂の一心寺と江戸の常照院とに葬られた。**

八代目も団栗・二升・夜雨庵の俳名で俳諧をよくし、書画にもすぐれた才能を持っていた。短い生涯だったが、数多くのみごとな遺筆を残した。

八代目フアンの熱狂ぶり

格別の美貌で、生涯独身で通した八代目の人気は、自殺の後もいっこうに衰えず、いつまでもその早すぎる死が惜しまれた。そのことは**三百種を超える膨大な死絵が出版**されたことによってもわかる。このような例は他に一人もない。（略）死絵の中に、団十郎を死に追いやったのは後の九代目の母親である七代目の愛妾ための陰謀と解釈し、ためという女性を悪役に仕立てあげたものもある。当時そんな噂も市中に飛び交っていたのであろう。

死の直後には何種類もの読み物が出版された。『八代目市川団十郎一代狂言記』『露時雨八代愁傷』『明烏夢物語』などである。こういつた書物が出版されたことは、それだけ多くの読者があったことを物語ってあますところがない。



課題



壬嘉永七歳

猿白院清成日同信士

寅八月六日

おしきふね浪花に残す旅の空 三舛

大坂中の芝居度り看板

荒事 八代目団十郎事

市川白猿

日数廿日之間罷出奉入御覧候

嘉永七寅年

浄筵信士 行年三十二才

八月六日

点往時村坂松山一心寺戒名

わかれともしらで浪花へのぼり鯉なみだ瀧

なすひいき連中

梅屋

(絵の手紙)

一筆残し候私義よん所なきわけ合にて大坂
表へあの地に罷在り此勤いたしては大江戸
の御ひいき様方たなし相済がたくぜひなく
かやうに笑二此御名残は山／＼にて申尽し
がたくお二だのみさきだち…

大津ゑ

八代目市川団十郎

行年三十二才

おゝい／＼八代目。お江戸をはなれて
 どこへ行。八代目なみだぐみ。いへ／
 \しやばではござんせぬ。すこしのい
 きはりで三ヶのつをあとにして。あの
 よへにはかまいり舛。やれ／＼はかな
 くなり田やと。女中たち。なげいてか
 へらぬくりごとはゑび蔵と御ひるきに
 おんあいわかれのしでのたび

▲極らくの大しばい。座元はさいのか
 わら崎。はすのうてなの秋狂言。きら
 れ与三郎に勘平はらきりは。しやばか
 ら下りし八代目。仏のけん物山をなし
 土間もさじきもうり切た。きんしはじ
 ごくのゑんまさん。赤おに青おには。
 きどばんの事なれば。三舛のしきせき
 ん。当りしばいで金もうけとゑんまも
 はじめてにこ／＼二葉顔